

論 文 概 要

○論文題目 全身性エリテマトーデス患者が出産に至る経験

○指導教員 人間総合科学研究科看護科学専攻 日高 紀久江 教授

(所 属) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 看護科学専攻 (博士後期課程)

(氏 名) 仁昌寺 貴子

【目的】

本研究の目的は、全身性エリテマトーデス患者（以下、SLE）が、出産に至る経験を記述し、思考や感情がどのように変遷するのかを明らかにすることである。

【対象と方法】

本研究の対象は、関東圏内5施設の膠原病内科外来に通院する20歳以上40歳以下のSLE患者で、発症後に出産を経験したことのある者とした。また、分析を進める過程で、対峙事例として出産経験のないSLE患者も対象に含めた。研究デザインは、質的帰納的研究である。研究同意の得られた者から、半構造化面接と診療録調査を実施し、グラウンデッド・セオリー法により分析した。分析の過程では、継続的比較分析と問いを繰り返し、新たなpropertyとdimensionが見当たらず、バリエーションが十分に把握でき、カテゴリ間の関係が十分に説明できた状態を理論的飽和として分析を終了した。

【結果】

出産経験のあるSLE患者25名（平均33.6歳）を分析対象とした。出産経験のないSLE患者2名（平均50.5歳）は、補足データとして扱った。SLE患者の妊娠・出産の経験では、**コアカテゴリ「出産に臨み手を尽くす」**が抽出された。以下では、メインカテゴリ、[サブカテゴリ]を用いて、本研究の結果を記述する。

SLE患者は妊娠や出産に纏わる、自分と子どもへのリスクを知り、自分が子どもを持つことは、普通の女性と比べて難しいと、**女性としての価値を低く感じていた**。しかし、そのような中でも**出産に臨み手を尽くす**ことで出産を実現した者の取り組み方には、取り組む姿勢と感情から大きく5つの類型がみられた。この類型は、出産を目指し自ら妊娠計画を進めた3つの類型と、計画せずに妊娠し出産を目指した2つの類型に分かれた。出産を目指し妊娠計画を進めた3つの類型では、病気がない人と同じように**普通に出産を望みたい**と出産に向き合う。しかし、最初は妊娠・出産に伴う大きなリスクが障壁となり、出産に踏み込む勇気が持てないが、徐々に自信を高め出産への意思を固めていた。また、妊娠・出産するためには医師の判断が必要であると考えた者は、**出産意向を汲む医師を求め**、医師の肯定的な態度や医師からポジティブな情報を得て自信を高めていた。このように妊娠計画を進めた者は、医師からの許可を基に、**[医師に安心してついていく]**パターンで妊娠するのが理想的である。しかし、子どもを切望するあまり、医師からの**[許可を待ちきれず強行する]**パターンや、医師の許可を必要とせず、**[病気を気にせず突き進む]**パターンで妊娠する者も存在した。一方で、計画せずに妊娠し出産を目指した2つの類型は、意図しない妊娠となり**[予定外で戸惑う]**パターンと、妊娠とSLEの発症が重なり、**[ただ恐怖しかない]**パターンであった。どちらの場合も短期間で意思決定し、**動揺しつつも出産を目指していた**。いずれの場合でも妊娠中は、不確かな状況が高まり、児に対する不安

が常にあるが、自分自身では祈るしかないため、妊娠中における疾患コントロールは、医師に委ねていた。無事に出産した者は、高いレベルでの達成感があり、「普通」の女性に近づいたと思えるようになり、出産は、自己の価値を取り戻す経験となっていた。

【考察】

SLE 患者の出産に至る一連の過程で特徴的であったのは、SLE による病気の不確かさに加え、妊娠することによってさらに不確かな状況が高まり、患者は常に不安と隣り合わせで過ごしながらも、出産に臨み手を尽くしながら出産を実現していることであった。また、妊娠中に疾患のコントロールを医師に委ねていたことは、自身では疾患コントロールが難しい SLE の特徴であると考えられる。

妊娠・出産へ取り組む姿勢や感情に大きく 5 つの類型が見られたのは、患者の欲しい情報が提供されていないこと、リスクに関する情報を得る機会が不足していたなどの医療従事者と患者間におけるコミュニケーションが影響していたと考える。

また、参加者は、発症後、妊娠が難しいと思考し女性としての価値を低く感じていたが、出産に至ることで、「普通」の女性に近づくことができたと実感し、女性としての価値を取り戻していたことから、SLE 患者にとって出産とは、自己の価値を取り戻す経験になっていると推察される。

以上より、SLE 患者が心身ともに安全で安楽な環境で出産を実現できる看護支援として、医師と患者間の調整役として機能することや、妊娠前から出産までの各局面に応じて、患者の不安に対する支持的な援助、及び患者が不安に適応できるように関わる必要性が示唆された。

【結論】

SLE 患者の出産に至るまでの経験を記述することによって、以下の知見を得た。

1. SLE 患者は、不確かな妊娠経過に常に不安を感じ戸惑いながらも、出産に臨み手を尽くすことで妊娠・出産を経験していた。
2. SLE 患者の妊娠・出産の取り組み方は、患者の取り組む姿勢や思考様式によって経験が異なり、患者と医療従事者とのコミュニケーションが影響していた。
3. SLE 患者は、妊娠・出産のリスクに直面し、女性としての価値を低く感じていたが、出産を実現し「普通」の女性に近づいたと自己の価値を取り戻していた。

本研究では、SLE 患者の出産に対する意向や姿勢、思考様式を含めた患者の視点による妊娠・出産の様相を描くことができた。医療従事者にとって SLE 患者の妊娠・出産の経験の全体像を共有することに繋がり、今後 SLE 患者の妊娠・出産の支援を考える基礎資料として寄与するものと期待される。